

リオの伝説のスピーチ

1992年6月。ブラジルのリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」に世界の指導者たちが集まりました。彼らを前に、12歳の少女、セヴァン・スズキは、その思いを語るチャンスが与えられます。

突然のチャンスに、急ごしらえのメモを手を、彼女はその思いを懸命に伝えようとします。



Hello, I'm Severn Suzuki speaking for E.C.O. - The Environmental Children's organization

こんにちは、私はセヴァン・スズキです。E.C.O.（子ども環境組織の略称）を代表してお話しします。

We are a group of twelve and thirteen-year-olds from Canada trying to make a difference: Vanessa Suttie, Morgan Geisler, Michelle Quigg and me. We raised all the money ourselves to come six thousand miles to tell you adults you must change your ways.

私たちは、この世界を変革しようとしている、カナダの12歳から13歳の子どもたちのグループです。：ヴァネッサ・スッティ、モーガン・ガイスラー、ミシェル・クイッグと私。あなたがた大人たちにも、ぜひ変革してもらおうと願うするために、自分たちで費用を集めて、6000マイルの旅をして来ました。

Coming here today, I have no hidden agenda. I am fighting for my future.

Losing my future is not like losing an election or a few points on the stock market. I am here to speak for all generations to come.

今日の私の話には、隠れた意図はありません。私は私の未来のために戦っています。自分の未来を失うことは、選挙で負けたり、株で損したりするのはわけがちがうんですから。私はここで話すのは、全ての未来に生きる子どもたちのためです。

I am here to speak on behalf of the starving children around the world whose cries go unheard. I am here to speak for the countless animals dying across this planet because they have nowhere left to go. We cannot afford to be not heard.

私がここで話すのは、叫んでも耳を貸してもらえない世界中の飢えに苦しむ子どもたちのためです。そして、地球の他に行くところもなく、絶滅しようとしている無数の動物たちのためです。

I am afraid to go out in the sun now because of the holes in the ozone. I am afraid to breathe the air because I don't know what chemicals are in it.

私は太陽の下に出るのが怖い、オゾン層に穴があいたのです。息をするのが怖い、空気にどんな化学製品が入っているかもしれないから。

I used to go fishing in Vancouver with my dad until just a few years ago we found the fish full of cancers. And now we hear about animals and plants going extinct every day - vanishing forever.

父とよくバンクーバーで釣りをしたものです。数年前に、体中ガンでおかされた魚を見つけるまでは。そして今、動物や植物たちが毎日のように絶滅していくのを、私

たちは耳にします。永遠に消えてしまうのです。

In my life, I have dreamt of seeing the great herds of wild animals, jungles and rainforests full of birds and butterflies, but now I wonder if they will even exist for my children to see.

私の人生の中には、いつか野生の動物の大きな群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見る夢があります。でも、私の子どもたちは見ようとしても、存在するかどうかわからないのです。

Did you have to worry about these little things when you were my age?

あなたがたは、私ぐらいの年代の時に、そんなことを心配しなければなりませんでしたか？

All this is happening before our eyes and yet we act as if we have all the time we want and all the solutions.

I'm only a child and I don't have all the solutions, but I want you to realize, neither do you!

こんな大変なことが、目の前で起こっているのに、まるでいくらでも時間があるように行動している。まだ子どもの私には、完全な解決策があるわけではありません。でも、あなたがた大人にもよい解決法なんてもっていないということを知って欲しい！

You don't know how to fix the holes in our ozone layer.

あなた方は、オゾン層にあいた穴をどうやってふさぐのか知らないでしょう。

You don't know how to bring salmon back up a dead stream. You don't know how to bring back an animal now extinct. And you can't bring back forests that once grew where there is now desert.

あなたがたは、命を失った川にどうやってサケを呼びもどすのか知らないでしょう。絶滅してしまった動物をどうやって生きかえらせるのか、知らないでしょう。そ

して、砂漠化した場所にどうやって森をよみがえらせるのかわからないでしょう。

If you don't know how to fix it, please stop breaking it!

どうやって直すのかわからないものを、こわすのはやめてください！

Here, you may be delegates of your governments, business people, organizers, reporters or politicians - but really you are mothers and fathers, brothers and sister, aunts and uncles - and all of you are somebody's child.

ここでは、あなたがたは政府とか企業家とか団体とか報道関係者とか政治家の代表であるかも知れません。でも本当に、あなたがたもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたがたのだれもが、だれかの子どもなんです。

I'm only a child yet I know we are all part of a family, five billion strong, in fact, 30 million species strong and we all share the same air, water and soil - borders and governments will never change that.

私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが50億以上の人間からなる大家族の一員であることを知っています。いやそれどころか、3千万種類の生物からなる大家族です。同じ空気と水と土を分かちあいます。国境や政府も、このことは変えることができません。

I'm only a child yet I know we are all in this together and should act as one single world towards one single goal.

私は子どもですが、私たちがみなこの大家族の一員として、ひとつの目標に向けて世界が一丸となって行動しなければならないことを知っています。

In my anger, I am not blind, and in my fear, I am not afraid to tell the world how I feel.

私は怒っています。でも、行き当たりばたりではありません。私は怖い。でも、私がかのように感じているかについて、世界に

伝えることを恐れません。

In my country, we make so much waste, we buy and throw away, buy and throw away, and yet northern countries will not share with the needy. Even when we have more than enough, we are afraid to lose some of our wealth, afraid to share.

私の国では、無駄なものをたくさん作り、買っては投げ捨て、買っては投げ捨て、それでも北の国々は、貧窮者とわかちあおうとはしません。物がありあまっても、自分たちの富をほんの少しでも失うのが怖い、わかちあうのが怖いのです。

In Canada, we live the privileged life, with plenty of food, water and shelter - we have watches, bicycles, computers and television sets. カナダでは、十分な食物と水と住まいを持つめぐまれた生活をしています。時計、自転車、コンピューター、テレビ、

私たちの持っているものを数えあげたら何日もかかることでしょう。

Two days ago here in Brazil, we were shocked when we spent some time with some children living on the streets. And this is what one child told us:

2 日前ここブラジルで、路上生活の子どもたちと出会い、しばらく一緒にいて、私たちはショックを受けました。ひとりの子どもが私たちにこう言いました。

"I wish I was rich and if I were, I would give all the street children food, clothes, medicine, shelter and love and affection."

「ぼくが金持ちだったら良いのに、そうになったら、全てのストリートチルドレンに、食べ物と、着る物と、医療と、住む場所と、愛と愛情をあげるのに。」

If a child on the street who has nothing, is willing to share, why are we who have everything still so greedy?

何も持たない路上生活の子どもが、分かちあう気持ちがあるのに、すべてを持っている私たちは、なぜこんなに欲が深いのでしょうか。

I can't stop thinking that these children are my age, that it makes a tremendous difference where you are born, that I could be one of those children living in the Favellas of Rio; I could be a child starving in Somalia; a victim of war in the Middle East or a beggar in India.

これらの子どもたちが、私と同世代だということが、私の頭をはなれません。どこに生れるかによって、こんなにも人生がちがってしまう。私がリオの貧民窟に住む子どもひとりだったかもしれない、ソマリアで飢えている子どもだったかも、中東の戦争の犠牲者かも、インドで乞食をしたかもしれないんです。

I'm only a child yet I know if all the money spent on war was spent on ending poverty and finding environmental answers, what a wonderful place this earth would be!

私はまだ子どもですが知っています、もし戦争のために使われているお金をぜんぶ、貧困を無くし環境問題を解決するために使えばこの地球はすばらしい場所になことを！

At school, even in kindergarten, you teach us to behave in the world. You teach us:

学校で、幼稚園でさえ、あなたがたは私たちに、世のなかでどうふるまうかを教えてくれます。

not to fight with others,

争いをしないこと

to work things out,

話しあいで解決すること

to respect others,

他人を尊重すること

to clean up our mess,

ちらかしたら自分でかたずけること

not to hurt other creatures

ほかの生き物をむやみに傷つけないこと
to share - not be greedy
欲張らずに分かちあうこと

Then why do you go out and do the things you tell us not to do?

それなのにどうして、あなたがたは、私たちにするなということをするんですか。

Do not forget why you're attending these conferences, who you're doing this for - we are your own children.

なぜあなたがたがこうした会議に出席しているのか、そしていったい誰のためにやっているのか忘れないでください。私たちつまりあなたがたの子どものためです。

You are deciding what kind of world we will grow up in.

あなた方は、私たちがどんな世界に育っていくのかを決めているんです。

Parents should be able to comfort their children by saying "everything's going to be alright", "we're doing the best we can" and "it's not the end of the world".

親たちは子どもたちをなぐさめることができなければなりません、そのために「すべてうまくいくよ」と言う。あるいは、「できるだけことはしてるから」とか、「この世が終わるわけではない」とか。

But I don't think you can say that to us anymore. Are we even on your list of priorities?

しかしもう、あなた方は、私たちにそんな言葉を言うことができるとは思えません。私たちのことは、あなた方の優先事項のリストに載せてもらっていますか？

My father always says "You are what you do, not what you say."

父はいつも私に「なにを言うかではなく、なにを行うかです」と言います。

Well, what you do makes me cry at night. you grown ups say you love us. I challenge you, please make your actions reflect your words.

さて、あなたがたがやっていることは、私を泣かせています。あなた方は、私たちが

愛していると言って育てます。私はいわせてもらいたい、あなた方の言葉を行動で示してください。

Thank you for listening.

ご清聴ありがとうございました。



セヴァン・カリス＝スズキ

<プロフィール>

1979 年生まれ。カナダ在住、日系 4 世。幼いときに両親と訪れたアマゾンへの旅で熱帯雨林の自然と接し、その森が広範囲焼かれる様を見たことがきっかけで、9 歳のときに ECO (Environmental Children Organization) という環境学習グループを立ち上げる。

1992 年、ブラジルのリオデジャネイロで「自分たちの将来が決める会議」が開かれることを聞き、「子どもこそがその会議に参加すべき！」と自分たちで費用を集め、ECO の仲間と共にブラジルへ向かう。NGO ブースでねばり強くアピール活動を続けた。会議そのものは、先進国と途上国の思惑の中で行き詰まっていた。サミット最終日、セヴァンは「子ども代表」としてスピーチするチャンスを得る。この感動的なスピーチは、警備員までもが涙して聴き、満場の拍手喝采を博した。「リオの伝説のスピーチ」として、世界中で紹介されることとなる。